これぞ老舗 ～やまがたに息づく 169

若松屋［南陽］

暮らし支える資材 提供

建築資材やプロ御用達の工具類が並ぶ店舗で電動工具を手にする菅野欣一郎社長＝南陽市宮内

屋根材のカラー鋼板の成形工程。機械を細かく調整して操作し、注文通りに仕上げていく

プロも納得の工具並ぶ

「柔軟性が大事。新しいものに挑戦していかないと」

広い敷地において、パイプなどの多種多様な建築資材、プロ仕様の工具類がずらりと並ぶ若松屋（南陽市宮内）。屋根材の加工や、ガラスとサッシの組み付けを行う技能員の丁寧な仕事ぶりが目を引く。製造業から転じて明治期に金物業を起こして以来、人々の暮らしを支え続け、今も地域住民の快適な生活環境の整備を後押しする。

■社名は屋号に由来

「若松屋の社名は屋号に由来する」と語るのは5代目の菅野欣一郎社長（59）。菅野家は代々の当主が文蔵の名を襲名する家柄。そのルーツは金山村（現・南陽市金山）とされ、およそ300年前に本家から独立し、現在の南陽市宮内に移り住んだと伝わる。

太平洋戦争前から戦後にかけて繊維機械に尽力した10代若松屋文蔵（菅野金太郎、1904―1990年）の記録によると、中興の人物は3代目文蔵。なりわいは定かではないが、1780年代の天明の飢饉（ききん）の際、人助けに奔走したとの記述がある。6代目は、機械製糸の技術を会得していた菅野子と結婚。智子は米沢藩の藩祖上杉謙信の重臣の子孫とされ、6代目と共に屋敷裏に製糸工場を建てて製糸業を営んだ。

転期が訪れたのは1900（明治33）年。同年2月に6代目が病死し、その約3カ月後、家の屋内は大火に見舞われた。菅野家の被害も甚大だった。当時、7代目は30歳前後で世帯。8代目（欣一郎）と子どもたちも幼く、高齢だった智子は一線の経営を前に製糸業の継続を断念。だが、それにめげず、同年秋には、焼失を免れた土蔵を店舗に改修して若松屋金物店を開業した。

当初は、生活雑貨品などを販売していたらしく、建築資材を扱い始めたのは昭和初期。22歳の若さで病に倒れた9代目の後、10代目の金太郎が太平洋戦争前後の事業をけん引し、戦後は住宅、生活関連資材の需要に応えた。83年には社長となった11代目の欣一さんも持ち前の建築さや商売に励み、屋根に売り上げを伸ばしていった。

■活路は対面販売に

60年には宮内新町に金属用金物の販売店を出店。扱う商品が多くなり、65年には、それまでの個人事業所を株式会社化して経営基盤を強化。68年、長年親しまれた土蔵の店を改装。75年には現在地に約1650平方㍍の店舗兼倉庫を新設し、後に当地を本社とした。85年、当時は珍しかったホームセンター形式の「ホームプラザ ワカマツヤ」に店舗をリニューアル。繁盛とした商品陳列などが評判を呼んだ。程なくして大型量販店などが台頭。同社を取り巻く状況は厳しさを増した。

活路は対面販売にあった。資材を売るだけでなく、じっくりと顧客の話を聞き、最適な資材を勧め、時に技術工に助言を行う。地域に根付いた建築資材のプロ集団として力を発揮した。欣一郎社長の妻・幸子取締役（61）は「まずアドバイスをする。売りっぱなしにはしない。どうすればお客さまの要望にこたえられるか、懸命に考える」と話す。

■要望に細かく対応

資材の性能を見極める確かな目で、高性能の商品開発にも挑む。合鍵の作製から、カーポート設置のオーダーなどにも細かく対応した。口コミで評判が広がり、住宅内への手すり設置などの需要も増した。

一方、社会情勢の変化から建築関係の職人は減少傾向にあり、高齢化という課題も抱える。そうした変容を肌で感じながら、地域の職人たちを一層盛り立てていきたいとの思いも強い。

現代は経営環境の変化が激しく、先が見通しにくい時代といわれる。99年に経営トップとなった欣一郎社長は「目標を決めて走り続けていく方が楽かもしれないが、柔軟性が大事。新しいものにどんどん挑戦していかないと。歴代の経営者も、同様に積極的に変化に対応してきたのだろう」と強調する。若松屋の社是は「明朗、親切、正確、敏速」であり、「商売の基本はここにある」と欣一郎社長。あれない軸と柔軟な発想で、会社一丸で歩みを進めていく。

半世紀ほど前に商品として売られていたてんびん棒と重り。計金などの資材の重さを量るのに使われたようだ

旧宮内町で営業していた家庭用金物販売店。地域住民の暮らしを下支えしていた（1960年の閉店当時）

創業からの歴史

- 1900（明治33）年 若松屋金物店を開業
- 1965（昭和40）年 株式会社に改組
- 1968（昭和43）年 土蔵の店舗を改築
- 1975（昭和50）年 店舗兼倉庫を現在地に新設
- 1989（平成元）年 社名を「若松屋」に変更
- 1999（平成11）年 菅野欣一郎氏が社長に就任